

# 無口な魔王が異世界に 召喚されました

☆あきつしま☆

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無口で強面な魔王である『ヘルアニデス』が、異世界に強制転移させられて色々と面倒事に巻き込まれながらも、知らず知らずのうちにハーレムを形成していく異世界ファンタジーです。

カクヨムで先行投稿しています。

URL：<https://kakuyomu.jp/works/1177354054918516325>

よろしければこちらの作品もどうぞ！

・ユニークスキルのせいでモテない俺は、酔っ払った勢いで奴隷を買いました。

URL: <https://kakuyomu.jp/works/11773540>

・出来損ないの転生魔術師〜三千年の時を越えて俺に会いに来たエルフがいるって本当ですか!?!  
〜

URL: <https://kakuyomu.jp/works/11773540>

# 目次

無口で強面な魔王	1
ミミとリン	6

## 無口で強面な魔王

星が空を覆い、人々が夢の中へと意識を落としていく頃。

場所は魔王城の中にある魔王の間。

一人の男が部屋のだ真ん中に鎮座する王座に腰を掛けながら、小さなカップ片手にティータイムを楽しんでいた。

人が寄り付かなさそうなほど恐ろしい顔、それでいて漂うオーラがただものでない彼の名はヘルアニデス。人間を恐怖に落とし入れている魔王軍のトップ。つまり魔王である。

そんな高い位についているのであれば、さぞかし両手に華状態だと思っだろう。

しかし、彼の周りには女性が一人もいなかった。いや、訂正しよう。人っ子一人いなかった。

今も見て欲しい。彼は馬鹿みたいに広い部屋でぼつんと一人きりでティータイムを洒落込んでいる。

夜遅いから、人がいないだけじゃないか？ いや、朝でも昼でも変わらない。彼の周りには誰もいない。ついでに言えば、魔王がいる魔王城には彼一人しか住んでいな

い。

なんとも寂しい魔王である。

しかし、見る人が見れば『なんてかつこいい魔王なんだ』となるかもしれない。魔王は孤高の存在で、一人でありとあらゆることとして無双するものだ。

意図的にそういうことで一人きりになっているのだとすれば、まあ領ける。しかし、この魔王の場合は意図せずに一人きりになっているのだ。

誰も周りに近寄らない理由。それは……

ズズズズズズ……

「……………」

ズズズズズズ……

「……………」

お茶を飲む音だけが魔王の間に響く。彼は一言も喋らない。何かを考えているのか、元々恐ろしかった顔が人を殺しそうな顔つきみたいになっちゃまっている。

おわかりいただけただろうか？ いや、これだけでは分からないかもしれないので早々に結論を言っちゃおう。

彼の周りに誰もいない理由。それはずばり、無口で顔が怖いからである。

強面でも話してみると意外と気さくな人で印象が変わった、などという話はよく聞く

ことであるが、彼はそもそも何も話さない。無口、超絶無口なのである。

魔王軍の作戦会議で部下にこれからどうしましょうか、と聞かれても何も答ええない。ご命令を、と言われてもその人の顔を見るだけで何も発しない。

何も言わないから、この魔王が何を考えているのか周りは理解できない。

面が良かったり優しいような表情をしていれば、まだ人は寄り付いてくるだろう。しかし、彼は何度も言っている通り、とても怖い顔をしている。彼の顔を見た人間は必ず失禁からの失神をし、魔王の部下である人たちも腰が抜けるレベルで怖い顔をしている。彼は努めて優しい顔をしているつもりだが、むしろそれが恐ろしさを加速させていつているので手に負えない。

別に彼は物理的に話せない、とかそういうわけではない。出そうと思えば声は出せる。しかし、彼は非常に言葉を考えて話そうとする。

挨拶一つにしても、気さくな感じが良いのか、魔王としてふさわしいオーラをだしたほうがいいのか、下手に出てヘコヘコしたほうがいいのか、ゴミを見るような目でしたほうがいいのか、などなど、めちやくちや色々と考えているのだ。

そんなことを考えているものだから何時まで経っても話せない。彼の声を聞きたいと思うなら、挨拶であれば『おはようございます』と言ってから少なくとも十時間は待たないといけないだろう。

ここまで異常なほど考えて口に出そうとするのには訳があるのだが……今は割愛しよう。

話が長くなってしまったが、そんな魔王だから誰も近寄らなくなってしまった。魔王軍の幹部は、彼の耳に情報を入れるためにたまーに魔王城に足を運ぶが、それ以外全く訪れてくれない。

ちなみにこの無口魔王。人間との戦い自体乗り気でない。そもそも人間との戦いだって魔王の幹部が勝手に推し進めたことで、魔王は一度たりとも許可を出していない。しかし、ご覧の通り何も言わない魔王なので、部下がある意味やりたい放題しているということだ。

無口魔王は正直言つて辟易としていた。魔王を辞めたいと思つていた。

彼はこの世界で初めて誕生した魔王、つまり始祖の魔王である。

そうなった経緯は無口魔王自体知らない。周りが勝手に彼を祭り上げて今の地位に就かせただけだ。

おそらくは、無口魔王の魔術の才能が凄まじく、世界最強とも言える実力があるからだろうが……そんなすごい彼は人間との戦争が始まって十年、一度たりとも戦争に行つたことはない。

無口魔王は空になったティーカップを手にながらため息をつく。魔王軍の長を辞



めたいと思いつながら。そして、それが自分には出来ないと分かっているから、こう思った。いや、こう思ってしまった。

『誰か、俺をどこかの世界へと連れて行ってはくれないかと』

## ミミとリン

「……………」

(……………ん?)

意識が徐々に覚醒してきた無口魔王は、無言のまま目を開け、周りを見る。

窓から差し込む光からして朝方だろうか。鳥がチュンチュンと鳴いている声も聞こえてきていた。

彼は自分が知らない間に眠ってしまったのだと判断した。しかし…………ふと無口魔王は違和感を覚える。

そう、彼の目には自分の知らない部屋が映っていたのだ。

どこことなく乙女チックな内装に、女性の甘くて男の部分を刺激するような香り。無口魔王が寝ていたベッドには可愛らしい熊のぬいぐるみが沢山並べられていた。

無口魔王は首をかしげる。

はて、俺はいつの間にかこんな可愛らしい魔王の間にしたのだろうか、と。

しかし、彼の部屋と比べて今日に見えている部屋は大きさが比べ物にならない。こちらのほうがめっちゃくちゃ小さいのだ。十対一くらいの違いだろう。

無口魔王は状況を整理しようとする。

自分はティーカップを片手にお茶を飲んでいたはずだ。しかし、そこからの記憶がない。何をしてたのか全く分からない。

早速躓いてしまった無口魔王。彼はもしや、と考える。俺は人間側に闇討ちされて捉えられてたのではないだろうか。

その証拠に、彼の首には大きくて頑丈そうな鉄の首輪が嵌められていた。これがただの首輪ではないことに無口魔王はすぐに気がつく。

何かしらの魔術らしきものがこの首輪には掛けられていたのだ。無口魔王は首輪に左手を当て、解析魔術を心のなかで唱えた後、件の首輪を調べてみることにした。

しばらくして。無口魔王はふむふむと心のなかで頷く。

この首輪は奴隷の首輪で、どうやら隷従の魔術が掛けられているようだ。しかし、自分であればいともたやすくこれを破ることが出来るであろうと。

この魔王は無口で強面である。しかし、魔術の腕はそんなじよそこのやつには負けな程度にはあり、謙遜をしないのであれば最強を名乗ることが出来るくらいには強かった。

しかし、そんな彼だったが首輪を壊すことはなく、おとなしくベッドでちよこんと座ることにした。

無口魔王は、自分に奴隷の首輪を嵌めた人物について興味が湧いたのだ。

自分が気が付かないうちに何処かへと拉致し、首輪をつける。並大抵の腕では出来ないことだ。

それに、自分が今いるこの空間も無口魔王をおとなしくするのに一役買っていた。

彼は久しぶりの女性の匂いでテンションが上がっていたのだ。

彼はポッチである。なりたくてなつたわけじゃないポッチである。そして、彼は若い男性であった。出会いがなくて色々溜まっている男が女の部屋にいるのだ。それはそれはもうウキウキである。

顔には出していないが、無口魔王は内心では歓喜していたくらいだ。状況が状況なのだ。だが、彼は腐っても魔王。ちょっとやさつとのことじゃ傷すら負わない強い魔王なのだ。

そういうことで無口魔王は大人しくしていたのだが、突然部屋の扉が開いて若い二人の娘が部屋に入ってきた。

一人は金髪で性格のきつそうなキリツとした目つきをした女性。もう一人は銀髪でおとなしそうな顔をした女性。ちなみに銀髪の女性は胸が出ており、金髪の女性は胸がほとんど無かった。

無口魔王は彼女たちを見る。彼女たちもまた無口魔王を見て——金髪の女性が腰を

抜かす。

「……なに!? ……ここ、こいつ寝ているときはいい感じの顔だったのに今の顔は人殺しの顔だわ!? リン! 危険だからあいつに麻痺の魔術をかけて頂戴!」

「ミミ。私達が彼を異世界から召喚したのにその言いぐさは失礼です。本当は奴隷の首輪だつてつけるのだから反対だったのですから。顔の怖さくらい我慢してください」

金髪の女性、ミミは叫び声を上げ、銀髪の女性、リンは表情を変えずに話す。

二人は訳あつて異世界から最強の人物を召喚したのだ。で、現れたのがこの無口魔王（意識なし）。

無口魔王は知らないが、寝ているときの顔はなかなかイケメンだ。

そんな彼を見て、ミミは不覚にも胸がときめいた。かつこいいと思った。

一方のリンは、彼を見てもいつもの優しそうな表情は変えなかった。しかしながら、表情を変えないだけで彼女もまた胸をときめかせていた。しかしながら、

二人共、イケメンには目がない乙女だったのだ。

まあ、起きているときの彼を見て、ミミは心臓がバクバクときかせているが。ときめきで心拍数が上がっているわけではない。恐怖で上がっているのだ。

ちなみにリンの方はというと、彼の恐ろしい顔を見ても怖がることなく、むしろ好感度を上げて胸のときめき度も上げていた。リンは強面の男性も好きな質だった。

まあ、そんなことを知る由もない無口魔王は、ミミの腰抜けを見て『これはやってしまったようだ』と思う。

補足すると、この時点までは無口魔王は二人の言っていることを理解できていない。なぜなら二人の使っている言語が魔王のものとは違ったからだ。

しかし、ここは流石だといふべきだろうか。無口魔王はそれにうろたえず、心のなかで翻訳魔術を唱えて彼女たちの話している言葉を理解できるようにした。

ちようどそのタイミングでミミがリンに手を引いてもらいながら立ち上がり、咳払いを一つして無口魔王に話しかけた。

「ごきげんよう、異世界から召喚された人。私はここザルス王国を収めている超絶偉い人よ」

「はじめまして。私は同じくザルス王国を収めているリンと申します。私とミミの二人がこの国の王様とか女王様みたいな感じですね」

二人が優雅な仕草で無口魔王にお辞儀をする。

彼は『おお、なんとも育ちの良さそうな人たちだ』と思う。もちろん口には出さない。実際、二人が着ている服は無口魔王から見てもなかなか高級そうなものだった。光の反射具合というか、漂うオーラみたいなのがお高そうだったのだ。

『異世界から召喚された人』という言葉が気になったが、ここは無口魔王。質問するこ

とが自分には出来ないことだと分かっているのに、彼女の言葉を疑わずに自分は異世界に来たのだと信じた。普通はもつと疑ってしかるべきなのだが、彼にとつてこれは好都合だったので、自分の良い方に解釈したとも捉えることが出来るだろう。

二人のことを少しづつ分析していつている無口魔王だったが、ミミが『で、あなたの名前を聞いても宜しくて?』と言ってきたのを聞いて思考を停止させる。

いや、分析する思考を停止して、自己紹介へと脳のリソースを全て回したと言うべきだろう。

彼は心の中で今この状況で最適な自己紹介を組み立てていく。

今の自分はザルス王国とかいう全く聞いたことも見たこともない国に召喚された身であると思われるから、おとなしく自分の名前をいうべきだ、とか。

いやいや、自分は魔王であるからして、何をしてくれているだ? と禍々しいオーラをだしながらいうべきだ、とか。

それだとみつももないから自己紹介をしてから詰問するべきだ、とか。

まあ、いつもどおり延々と頭の中で考える。

今のペースで行くなら、あと二日ほどで自己紹介を出来るようになりそうであった。

しかし、彼女たちは彼のことを全く知らない。なぜなら、異世界から召喚した謎の男だったからである。つまりは、この男が無口で、返事をするのにバカみたいな時間を要

することなど露も知らない。

となると、必然的に数十秒待った辺りでしびれを切らすのは当然であろう。

ミミはこの目の前で人殺ししそうな顔をしている男に勇気を振り絞ってもう一度名前を聞くことにした。彼女はもしかしたら聞こえなかったかもしれないと思ったのだ。

「あなたのお名前は？」

「……………」

「言葉が通じていないのかしら？」

「……………」

反応なし。

彼女は彼の聴力の問題があるのかと思い、無口魔王の頭に直接声を送ることにした。

〈あなたのお名前は？〉

〈……………〉

こちらも反応なし。

脳内に直接声を届ける場合、例え相手と使っている言語が違ってても魔術が勝手に翻訳してくれるはずなので、言葉が通じないなんてことはありえないはずだった。もちろん、聞こえないということもありえない。

ミミはこれらから、自分が目の前の強面野郎に無視されていると判断した。



彼女にとってはこれは屈辱的なことだった。ミミは誰もが認める美女。男に声をかけようものならコンマ一秒で返事が帰ってくるレベルなのだ。だから、過去一度も無視をされた、なんて経験はなかった。

ミミは自分が怒っていることを見せつけるために体を震わせる。

もちろん、これしきのことと怒ったりはしない。これは彼になめられないためのポーズである。心の中では『恐ろしい顔をして美女である私を無視。……中々面白い男じゃない。いいわね』と思いながら少しだけ顔を赤くしていた。何が面白いのかは本人以外分からない。

リンの方は、相変わらず優しそうな表情を変えずに胸をときめかせていた。中々肝が座っていて好感がもてる人ですね、と思いつつながら。